2004年12月27日

人間科学研究科長　殿

藤森 麻衣子氏　博士学位申請論文審査報告書

藤森 麻衣子氏の学位申請論文を下記の審査委員会は，人間科学研究科の委嘱をうけ審査を行ってきましたが，2004年12月11日に審査を終了しましたので，ここにその結果をご報告します.

記

１．申請者氏名：藤　森　麻　衣　子

２．論文題名：がん医療における患者－医師間のコミュニケーションに関する研究

３．本論文の構成と内容

本研究は，がん医療において治療効果に影響する重要な心理社会的要因である，患者と医師の間のコミュニケーションのあり方を探るとともに，患者の意向に基づいて「悪い知らせ」を伝えることができるような，医師を対象としたコミュニケーション・スキル・トレーニングプログラムを作成し，それが医師のがん患者に対するコミュニケーションの改善にどのような効果を持っているかを明らかにした研究である.

第１章においては，がん医療における患者－医師間のコミュニケーションに関する従来の研究が展望された．これまで，患者にとって「悪い知らせ」が伝えられる際の患者－医師間のコミュニケーションが患者の精神的状態に影響することが指摘され，悪い知らせを伝える際のコミュニケーションのあり方について，医療者の経験則に基づいた望ましいコミュニケーションのガイドラインが作成され，推奨されてきた．しかしながら，これまでの研究を展望すると，①これまで提唱されてきたガイドラインは必ずしも患者の意向と一致しない，②その結果，患者の意向に注目する必要性がある，③患者の意向を扱った研究の多くは，対象者が少ない質的研究であるか，ガイドラインで推奨されているコミュニケーションの要素のみを検討しているだけである，④わが国では，悪い知らせの伝え方に影響する患者の意向が検討されていない，⑤コミュニケーションには文化的背景の影響が大きいことを考えると，これまで欧米で報告されてきた知見をそのまま応用することの妥当性には疑問が残されている，等の問題点のあることが明らかにされた.

また、悪い知らせを伝える際の医師のコミュニケーション技能を改善するための介入法として，医師を対象としたコミュニケーション・スキル・トレーニング（CST）について，

その重要性，具体的内容，および有効性が先行研究から展望され，CST ががん医療に携わる医療者のコミュニケーション・スキルの向上や，患者とのコミュニケーションに対する自己効力感の向上に有効であることが指摘された．同時に問題点として，患者への影響を検討した研究が少ないこと，ポジティブな結果が示されていないこと等から，患者の意向を反映した CST プログラムを開発する必要性のあることが指摘された．

そこで第 2 章では，第１章における問題提起を受けるかたちで，本研究の目的が提示された．すなわち，わが国のがん医療における悪い知らせを伝える際のコミュニケーションに関して，患者の意向を踏まえたコミュニケーションを促進するために，がん患者を対象として，がん医療における悪い知らせを伝える際のコミュニケーションに関する患者の意向を明らかにし，患者の意向に基づいたコミュニケーションを促進するための介入法の有効性を検討することの必要性が論じられ，本研究の目的と構成が示された．

第 3 章では，がん患者を対象とした調査の内容分析により、悪い知らせが伝えられる際の患者の意向が，「場の設定と主導権」，「付加的情報」，「悪い知らせの伝え方」，「情緒的サポート」の４要素で構成されていることを明らかにした．また，このような構成要素は，欧米における患者の意向の構成要素，および，医療者の経験則に基づいてこれまで推奨されているコミュニケーションの構成要素と類似しているが，より複雑である可能性が指摘された．

第４章では，悪い知らせを伝えられる際のコミュニケーションに対する患者の意向の特徴として，わかりやすい説明，治療や病気についての説明，希望を維持する説明，正確な情報，医師が患者に直接はっきりと情報を伝えることといった諸点が含まれていることが示され，同時に，不確実な情報の開示やその伝え方が重要であることが示唆された．また，コミュニケーションのあり方に関連する要因が検討され，男性では断定的な口調，女性では段階的に伝えられることが好まれること，年齢が高くなるにつれ，また患者の教育経験年数が長くなるにつれ，淡々と伝えられることを希望する傾向のあることが示された．そして，婚姻している人の方が，余命についての情報を求める傾向のあることが示された．

第 5 章では，患者の意向を考慮した悪い知らせを伝える際の CST プログラムを開発し、医師を対象とした CST プログラムを実施し、その結果、がん医療において，悪い知らせを伝える際のコミュニケーションに対する自己効力感が CST の後に増加し，3 か月後も維持されることが示され，CST が医師のコミュニケーション・スキルの向上に有効であることが示された．

第６章では，がん医療における患者－医師間のコミュニケーションに関する本研究の総合的考察を述べ，本研究の意義として精神腫瘍学への示唆，およびコミュニケーション・スキル・トレーニングという臨床心理学的介入の可能性について考察された．

４．本論文の評価

本研究の結果，新たに得られた知見は以下の通りである．すなわち，

①わが国のがん医療において，悪い知らせが伝えられる際，患者の意向は，「場の設定と主導権」，「付加的情報」，「悪い知らせの伝え方」，「情緒的サポート」の４要素で構成されていること，
②悪い知らせが伝えられる際の患者の意向は，これまで欧米において指摘されてきた患者の意向の構成要素，および，医療者の経験則に基づいて推奨されているコミュニケーションの構成要素と類似しているものの，わが国では，より複雑であること，
③具体的には，わが国における患者の意向は，わかりやすい説明，治療や病気についての説明，希望を維持する説明，正確な情報，医師が患者に直接はっきりと情報を伝えることにあること，
④不確実な情報の開示やその伝え方が重要であること，および，患者の性別や教育経験年数，婚姻状況等によって患者が希望する医師による説明の仕方に違いがあること，
⑤悪い知らせが伝えられる際の患者－医師間のコミュニケーションを促進するための介入法として，コミュニケーション・スキル・トレーニング（CST）を行い，CST は，がん医療において，悪い知らせを伝える際のコミュニケーションに対する医師の態度改善に有効であること，
等の諸点である．

以上の研究の成果に基づいて臨床心理学的観点からがん患者と医師のコミュニケーションの改善に関する示唆を得たことは大きく評価することができる．また，本研究において行われた医師を対象としたコミュニケーション・スキル・トレーニングは，がん医療の改善に大きく貢献するものである．

そうした点から本研究は，これまでのわが国における臨床心理学研究に見られない独創性と新しい知見をもたらすものであり，がん患者の治療のあり方に関して新たな示唆を与えるものである．

上記のような評価を得て，本審査委員会は，藤森麻衣子氏の学位申請論文「がん医療における患者－医師間のコミュニケーションに関する研究」が博士（人間科学）に値する研究であるとの結論に至った．

５．藤森　麻衣子氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	教授	博士（医学）（東京大学）	野村　忍　印
審　査　員	早稲田大学	教授	博士（人間科学）（早稲田大学）	根建　金男　印
審　査　員	北海道医療大学	教授	教育学博士（筑波大学）	坂野　雄二　印
審　査　員	国立がんセンター	部長	博士（医学）（広島大学）	内富　庸介　印